

氏名	佐原康夫
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	論文博第415号
学位授与の日付	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	漢代都市機構の研究

論文調査委員 (主査) 教授 礪波 護 教授 鎌田 元一 助教授 浅原 達郎

### 論文内容の要旨

春秋戦国から漢代にかけて、中国社会は、鉄器の普及や、都市と商工業の発展、郡県制統一国家の出現に代表される、巨大な社会変動を経験した。この過程において、城郭に囲まれた都市は、社会の政治的、経済的な枠組みとして、常に大きな役割を果たしてきた。本論文は、春秋戦国時代の都市が、郡県制下の県としてどのように変貌を遂げたのか、そのプロセスを実証的に検討した研究である。具体的には、都市の構成要件として城郭、行政機構、市場といった都市的機構を取り上げ、それらの構造と機能、またその変遷を重ね合わせて考察している。全体は序論につづいて、各章がそれぞれ長短三節と付論からなる四つの章から構成され、最後に結論が付されている。

第一章「城郭都市の形態」では、春秋戦国時代から漢代に至る城郭の変遷をたどりながら、都市の中の都市であった長安の位置づけが明らかにされる。第二章「都市の財政と官僚機構」では、財政機構を中心として、都市に置かれた官衙の構造が詳細に検討される。これは官僚機構の入れ物としての役所を、具体的な空間の中に位置づけて分析しようとする研究であり、いわゆる官僚制度史とは視点を異にする。第三章の「市場と商工業」では市場と商工業が取り上げられ、都市における市場管理、工房と手工業者の位置づけ、古代を代表する商品である鉄器の問題が論ぜられる。特に鉄器専売制度は、古代貨幣経済の分水嶺とも言われる、前漢武帝の財政改革の重要な一環であり、財政論や貨幣経済論とも必然的に関わっている。つづく第四章「貨幣経済」では、都市の経済的機能と本質的に結びついている貨幣経済が、財政との関わりにおいて考察され、そこから中国の古代社会における人間の心性と経済のあり方が分析される。

都市の外枠を形成する城郭は、戦国時代に国都の巨大な城郭と中小規模の城郭とに二極化し、中小規模の城郭の数が激増した。軍事的観点から人口や財貨などの社会的資源が集中された城郭には、それぞれに府・庫・倉といった財政機構が置かれ、また城郭内に国家的に管理された市の機構が整備されて、単なる軍事基地ではなく、財政と地域の商工業の中核となる都市として機能するようになっていった。こうして形成された戦国時代の大小の都市は、秦の全国統一に伴って、県一郷一亭一里という階層化された集落単位として再編成され、漢代の県城クラスの都市に代表される、郡県制下の都市が出現したと考えられる、と述べている。

論者は、前漢前半期の都市は、そのプロトタイプとなった戦国時代の都市の様相を引き継いでいる、との見通しをたてる。たとえば首都の長安は、秦咸陽城を拡張する始皇帝の構想を下敷きとして形成され、これを「漢家の都」として換骨奪胎したものであった。また地方においても、都市を中心とするさまざまな交易市場のネットワークが、亭のシステムと重なっていること、多くの県が官営の各種工房を備えており、官用の器物を自給的に生産していたことは、県がそれぞれに完結した財政的・経済的ユニットとして機能する、戦国時代の都市の構造を受け継いでいたことを示す。漢代の都市に置かれた官府は、中央と地方、権限や規模の大小を問わず、それぞれの長官をあるじとするミニ朝廷ともいべき構造を持ち、また規模の大小以外には質的に差のない財政機構を備えていた。もとより統一国家とはいえ、初期の漢王朝は皇帝と強大な諸侯王国の緩やかな連合体に過ぎず、それぞれが大小の朝廷として相似形をなしていた。このように漢代の都市と官僚機構に見られる顕著な相似性は、戦国以来の都市の様相を色濃くとどめたものといえるだろう、と論じるのである。

論者は、このことをよく表しているのが、貨幣制度の沿革である、とする。秦から前漢前半期にかけて流通した半両銭は、実際には布帛などの実物貨幣に従属的であって、緩やかな貨幣統一に向かっていた四銖銭の時代においても、その使われ方は「郡県ごとに同じからず」という状況であった。この状況が事実上放置され、かつそれで済んでいたことは、小規模で分散した市場の孤立性ととも、国家の財政がこのような市場を越えたレベルでの機能を果たしておらず、その必要性も少なかったことを示している。そしてこのような地域的市場の分散性を前提として、地域と地域の間を、また場合によっては財政と社会の間をつなぐ物流の担い手となっていたのが、前漢の前期に活躍して「郡国を周流」した、富商大賈を代表とする商人たちであった、と指摘している。

この時期を代表する商品として、鉄器があげられるが、論者は、各地の鉱産地で生産された鉄素材や製品に、くず鉄の流通も加わって、製鉄産業は鉱産地を中心に一郡から数郡にまたがる規模の、当時としては例外的に広い市場を発達させていたことを論証している。当時の鉄器は農民の必需品であるが故に、その需要は広い範囲で薄く広く発生し、価格も決して高くはなかった。大規模な鉄器生産をきっかけに、大いに富んだ大商人も出現した。鉄器のように高度な技術を要する手工業製品が、広く安価に提供され、その生産販売が致富のきっかけとなり得たことは、当時の貨幣経済の一定の発展を物語っている。とはいえ鉄器は、末端においてはごく小規模な鍛冶屋の手から、物々交換や掛け売りを含む、多様でほぼそととした手段で農民の手に渡っており、農民の生活を強引に貨幣経済に巻き込んでいくだけの力を持っていたとはいえない、と述べている。そして、分散的な小地域市場を解体し、より大規模な市場を形成したり、貨幣流通の地域差を解消していくだけの、巨大な動きとはほど遠かったと考えられる、と指摘している。

論者は、先学の諸研究を踏まえて、呉楚七国の乱を契機に実行された中央集権化を経て、前漢武帝の時代になって初めて、中央対地方一般という政治の図式が成り立つ。武帝の財政改革は、この図式を制度として定着させていく、多難な試行錯誤でもあった。外征などによる急激な財政支出の拡大と、大規模で急速な物資調達の必要は、経済全体を混乱させ、場合によっては物資調達の行われる地域に破壊的影響さえ及ぼした。次々に打ち出される財政政策や貨幣制度は、塩鉄専売制度や各地の大規模な官営工房を組み込み、さらに中央政府が独占発行する五銖銭を重要な手段として、財政的物流の一元的調整管理を行う、均輸の機構に集約される。この過程は、1国の物資の需要と供給が価格変動によって自律的に調整されるような、大規模な価格形成市場の不在を前提としている。巨大な漢帝国の富を集中する枠組みは、孤立分散的な市場経済ではなく、一元的な財政的物流管理しかあり得なかったのである。

武帝の財政改革の時期から、中央政府と県の間で、広域行財政ブロックとして郡の自の役割が強化されていく。この流れは前漢後期、郡と県の地方行政において、諸曹の機構に分かれた官衙の機構整備を促した。また郡県において長官官房として「門下」が形成され、その地の知識人や人格者が集められたことは、官僚機構とその運営に儒教イデオロギーが浸透していったことを物語る。この動きは、「郷曲に武断する」各地の在地有力者が地方官府に食い込み、あるいは取り込まれていく過程として見ることもできよう。前述の中央対地方という図式は、郡県の官衙という微視的現実の中で、よそ者の長官対在地社会という微妙な構図を描く。

こうして漢代の官僚制的郡県支配は、巨大な中央政府の成立に伴って、郡治や県城を中心とする政治経済的小地域社会を生み出していった。これは郡県制という大枠の変動ではなく、その枠内での分極化が進行したものと考えられる。秦漢統一帝国が後世に残したのものとして、皇帝の称号や銅銭のデザイン、あるいは官僚機構とともに、このような県城を中心とする政治経済的地域社会を、是非ともあげておくべきだろう。この社会は、中央の王朝権力に依存しながら、これと決して共倒れにはならず、貨幣経済の波が互酬的ネットワークの彼方に消えていくような、一種不思議な社会であるらしい。

論者は、漢代の都市機構として様々な要素を取り上げてきたが、その過程で、例えば巨大な城郭に対する県レベルの中小城郭、銅銭に対する現物貨幣、また合理的貨殖術に対する互酬的心性のように、従来の研究では視野に入って来にくかった要素の存在を指摘してきた。このような水面下の存在は、実はしばしば水面上の要素よりも巨大である。やっと水面下に手を差し伸べられる、水際に降り立ったところ。これが本論文の到達点である。その意味でこの論文は、漢代史の本体というよりも、舞台装置の研究に終始している。この舞台の上で、『史記』や『漢書』の登場人物たちを、もう一度生き生きと動かしてみることが、今後の課題である、と述べている。

## 論文審査の結果の要旨

「漢代都市機構の研究」と題された本論文は、春秋戦国時代の都市が、郡県制下の県としてどのように変貌を遂げたのか、そのプロセスを実証的に検討した重厚な研究である。具体的には、都市の構成要件として城郭、行政機構、市場といった都市的機構を取り上げ、それらの構造と機能、またその変遷を重ね合わせて考察している。

全体は序論にづづいて、〈各章がそれぞれ三節と付論からなる四つの章〉、すなわち第一章「城郭都市の形態」、第二章「都市の財政と官僚機構」、第三章「市場と商工業」、第四章「貨幣経済」から構成されて、最後に結論が付されている。ただし、各章を構成する節となっているのは、もともと『東洋史研究』『東方学報』や京都大学人文科学研究所の研究報告などに発表されて学界で好評を博してきた諸論考なのであり、通常ならば、本体は〈各部がそれぞれ三章と付論からなる四つの部〉から構成されている、と称すべき論文である。

本論文で扱われる都市機構は、都市における国家的制度のみならず、都市を結節点として発現する社会的メカニズム全体を指している。従来の都市論や都城制度論と異なり、巨大な社会変動を、郡県制下の都市という枠組みにおいて総合的に検証している点、また、遺跡や遺物、画像資料や出土文字資料など、最新の多様な考古学的資料が総合的に活用されている点、本論文の大きな特色であり、漢代の都市に見られるさまざまな国家的・社会的機構を実証的に解明し、その沿革とメカニズムの分析を通じて、当時の社会と国家の動きを具体的に理解することを目指している。

漢代の都市はいかにして生まれてきたのだろうか。これが論者の第一の関心事である。都市国家ともいわれる春秋戦国時代の都市が、どのようにして秦漢時代の県に変貌を遂げたのか、そのプロセスを明らかにしようとした。本論文のもう一つの柱は、過去数十年間に劇的な成果をあげてきた考古学的発掘調査と出土資料の検討である。論者は、すでに膨大な数と種類に達する遺跡と出土資料を、どのように整理し、そこからどのような意味を読みとっていくか、に関心を注いでいる。

一般の文献学者は、考古学資料をあつかうとき、あくまで補助的資料とみなして、しかも他の考古学の専門家の研究を媒介として、その結果のみを利用することが多い。しかし、これはその考古学の専門家の能力のいかんによっては、思わぬ落とし穴にはまる危険性がある。論者は、できうるかぎり自力で考古学資料を解説し整理するという姿勢をとる。これは常に考古学の専門家たちと交流をもち、そのなかで考古学資料をあつかう技量をみがいてきた論者の努力の結果であり、その可能な文献学者は実はそれほど多くない。まれには専門家でないがための不足から免れることはさげがたいが、しかし大体において、考古学の専門家と同等の水準を達成しており、なかには第一章「城郭都市の形態」の付論「漢長安城未央宮3号建築遺址について」における長安城未央宮出土の骨片のごとく、専門家の水準をしのぐものもある。

このような姿勢は、第三章「市場と商工業」の第三節「漢代鉄専売制の再検討」から、付論1の「漢代の製鉄技術について」、付論2の「南陽瓦房莊漢代製鉄遺跡の技術史的検討」にいたる製鉄史の研究の際にも認められる。漢代の鉄の専売を論じて、製鉄技術に及び、その方面の専門的な議論に果敢にアプローチしているのは、高く評価すべきである。

関連する中国考古学文献をていねいに収集していることは、目立たないが、論者の研究の確かな土台となっている。それらは日々増加するので、絶えざる収集の努力が要求され、しかも現状では研究者の利用に耐えうるデータベースが学界に供給されておらず、すべて個人の作業に頼るほかない。第一章の「長安城関係参考文献一覧」や第三章の「漢代製鉄史関係文献一覧（地域別）」をはじめ、各章で引用される諸文献は、この分野の研究を志すものにとって、きわめて有用な参考目録となっている。しかも初出論文執筆以後も継続して収集の作業が行われていて、今後のいっそうの拡充も期待される場所である。きわめて当たり前のようであるが、それをこなしている研究者は少なく、この点も論者の研究姿勢は評価にあたいする。

論者の資料の分析は、つねに穩当を欠くことがない。論理の飛躍や無理なこじつけによって議論をすすめる古代史の研究が少なくないなかで、論者の研究姿勢はやはり際立っている。ただし時にはそれが若干の突っ込み不足とうつることもある。たとえば、第三章第一節「漢代の市」の長安の市の位置比定はその例であり、李里市や社門外の市については、再検討の必要があるのではなからうか。しかし、その場合も、いくつかの資料の補充によって容易に再検討が可能であると思われるのは、論者の推論にもともと無理のないことが、結果として有利に働いている、と言ってよいであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。

2001年3月2日，調査委員3名が試験を行った結果，合格と認めた。